

## &lt;全体分析&gt;

試験時間 90 分

## 解答形式

記述・選択・計算・論述

## 分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

## 出題の特徴や昨年との変更点

計算問題の量が減少した。

## その他トピックス

地学問題Ⅳは選択問題の割合が大きいが、じっくりと取り組む必要がある良問である。

## &lt;大問分析&gt;

番号	出題形式	出題分野・テーマ	範囲	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	記述 選択 計算 論述	太陽 惑星	地学	問1は空欄の外の語に注意すること。 問2は縦軸の数値に注意すること。 問6の計算は煩雑である。式を整理して手際よく計算したい。	標準
II	記述 論述 計算	海洋 大気	地学	問2の(1)と(2)は解答欄の大きさに戸惑ったかもしれない。問われた内容を両方答えるように。 問4は、温度と塩分について、それぞれ述べればよい。 問5(2)は、(1)の答えも加味して立式すること。	やや易
III	選択 記述 論述	火山 火成岩	地学	問2の噴火様式を聞く間は珍しい。 問7(2)は、教科書にあまり詳しい記載がないため答えにくかったかもしれない。	やや易
IV	選択 論述 記述	地質 地史	地学	図や選択肢をよく見て取り組まなければミスをしてしまうだろう。 問4(1)は、選択肢を注意深く見ること。(3)は、E層より下位の地層の変位がB層の2倍であることの意味を取り違えないように。	やや難

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

## &lt;学習対策&gt;

京都大学は、論述問題の比率が極めて高い。また、本年は少なかったが計算問題も多く出題される。解答用紙の解答欄の数を見て、くじけそうになるかもしれない。しかし、解答欄を埋めることを目標とするべきではなく、自分が十分と思う内容を簡潔にまとめることこそ肝要である。また、問題文をよく読み、何を答えるべきかを把握することも重要である。論述や計算の対策に十分な時間をかけるべきであり、時間配分にも注意を払う必要がある。また、様々な出題形式の問題に備えるためにも、教科書の隅々まで目を通すこと。そして、過去問演習を繰り返すべきである。